

幻術

で婚約者に化けた

幼

なじみに

何も

気づかないまま

犯

されていた

KirR

【ご注意】

本作は成人向け作品です。十八歳未満の方の閲覧はご遠慮ください。

※この作品には、同意のない性行為の描写を含みます。

※作中の行為や思想を肯定・推奨するものではありません。

※この物語はフィクションであり、実在の国・人物・団体とは一切関係ありません。

本作品の無断転載・複製・再配布を禁じます。

幻術で婚約者に化けた幼なじみに、何も気づかないまま犯されていた

K
i
r
R

「婚約？」

突然呼び出された実家で、マリリーナ・グレースは目を丸くする。目の前の父は穏やかに微笑み、嬉しそうに目尻を下げている。

「うん。エヴァンズ家から申し込みがあったんだ。長男のクレイクんの相手にぜひとね」

「クレイさんの……」

マリリーナは少し不安になる。クレイ・エヴァンズは幼なじみの兄であり、マリリーナの上司だ。そして高い魔力を持つ天才としても知られる。その実力は魔術に関わる一切を管理する巨大組織・魔術院において、二十五歳の若さで部長を務めるほどだ。

グレース家とエヴァンズ家は、共に高い魔力で知られる名家だ。マリリーナは魔術学校を首席で卒業した実績もあり、実力としても十分にクレイとつり合っている。婚約の話が来るのは妥当だ。

不安の原因はそこではない。ただ純粋に、マリリーナがクレイを苦手としているだけだ。

（クレイさんって、めちやくちや冷たいのよね……。話しかけても簡素なあいさつしか返ってこないし、無表情というか、感情がないというか……。正直ちょっと怖い）

しかし、これは相談ではない。報告だ。マリーナに拒否権はない。だからこそ父は、魔術院の宿舎で暮らすマリーナをわざわざ呼び出したのだ。

満面の笑みを浮かべる父は、すごくいいことをしたと思っていそうだ。もしかしたら、マリーナとクレイの仲がいいと思っているのかもしれない。

（エヴァンズ家には、小さいころから何度も遊びに行ってるもんね……。実際はクレイさんじゃなくて、弟のロイと遊んでただけど）

しかしそんなこと、父が知る由もない。マリーナは諦めを隠し、笑顔を父に向ける。

「わかった。明日クレイさんにごあいさつに行くね」

「うん。よろしくね」

父の笑顔に、マリーナは少し罪悪感を覚える。ばれないように、心の中でため息をつい

た。

「はあ……」

実家から宿舎に戻ったマリーナは、早々に着替えてベッドに横たわる。時間が経つにつれて、婚約というものが心に重くのしかかってきた。

（クレイさんが嫌いなわけじゃないんだけど……というか、好きとか嫌いとか言えるほど話したことがないのよね。あの人との結婚生活とか、全然想像ができない）

マリーナは柔らかな青い髪が乱れるのもかまわず、ごろりと寝返りを打つ。こういうときは早く眠ってしまった方がいい。それに、明日も朝から仕事だ。

マリーナはまぶたを閉じようとする。金色の瞳が隠れかけたそのとき――

コン、コン、コン

丁寧なノックの音が聞こえ、マリーナは閉じかけたまぶたを開く。人が訪ねてくるには遅い時間だが、誰だろうか。

（緊急……にしては急いでなさそうだけど、夜だから控えめにしただけかもしれないし、出た方がいいかな）

マリーナはネグリジェの上に上着を羽織り、パタパタと玄関に向かう。もし不審者だったら水の魔術を食らわせようと、警戒しながら扉を開いた。

目に飛び込んできたのは、背の高い男性の胸板だ。白いシャツと黒い外套がいつに覆われた身体は、一見細いがしつかりとした筋肉が浮き出ている。下に履いているスラックスにはしつかりとアイロンがかけられており、ラフだが生真面目さを感じる装いだ。

服装に見覚えはない。しかしなんとなく記憶にある白檀びやくだんの香りに、マリーナは驚いて顔を上げる。

「クレイさん……!？」

職場と変わらない冷めた表情で、クレイはマリーナを見下ろす。サラサラとした黒髪から覗く切れ長の目は、怒っているわけではなさそうだが威圧感を放っている。^{のぞ}

「こんな時間にすまない。婚約のことで、少し話がしたい」

淡々とした声は業務連絡のようで、とても婚約相手に向けるものとは思えない。やはり仕事以外でもこういう態度なのだと、マリーナは改めて認識する。

(それはいいけど……こんなところをみんなに見られたらまずい……!)

マリーナは廊下を見渡す。宿舎には当然マリーナ以外の女性たちも暮らしている。その人たちに、クレイが部屋を訪ねてきたことを知られるのはあまりいいことではない。なぜなら、クレイは女性に人気があるからだ。

マリーナからすると無愛想なだけの表情が、「クールでかっこいい」らしい。顔立ちが整っているのは間違いないが、笑顔の方がいいと思うのはマリーナだけなのだろうか。

とにかく、嫉妬で嫌がらせを受けるのは勘弁だ。仲のいい人ならからかうだけの可能性もあるが、それはそれで面倒臭い。

（明日には婚約発表があるし、見られたところで変わらないかもしれないけど……やっぱり不安は不安よね）

「わかりました。立ち話も何ですし、どうぞお入りください」

マリリーナが招くと、クレイは大人しく室内に足を踏み入れる。マリリーナはすぐに扉を閉めて鍵をかけた。

誰にも見られていなさそうで、マリリーナはほっとする。話し声は、近くを流れる水路の音で聞こえていないだろう。

マリリーナはテーブルに乱雑に載った化粧品をクローゼットに押し込み、何事もなかったかのように椅子を引く。

「どうぞおかけください。お茶をお持ちしますね」

（寝る前だから、安眠作用があるハーブティーがいいかな）

そんなことを考えながら、マリーナがクレイに背を向けたそのとき――

バサツと外套が落ちる音と共に、マリーナの背中に温かな感触がぶつかる。それがクレイだと気づくより早く、マリーナは強く抱きしめられていた。

（え……！？）

突然のことにマリーナは困惑する。あの冷静沈着なクレイが、人に抱き着くような真似をするとはとても思えない。しかし漂う白檀の匂いが、背後の人物が間違いないくクレイだと伝えてくる。

「マリーナ……」

低くかすれた声で囁かれ、マリーナの肩がビクリと跳ねる。艶っぽい響きには、隠しきれない甘さが滲^{にじ}んでいる。

「は、はい。何です……」

「マリーナ、好きだ」

(……え?)

信じられない言葉に、マリーナの身体が熱くなる。クレイの顔を見ようと首を捻ひねると、大きな手で顎を掴つかまれ、唇を柔らかいもので塞がれた。

「んん!？」

(嘘……キスされてる!?)

視界いっぱいに広がるのは、彫刻のように整ったクレイの顔だ。ほのかに紅潮する頬に、マリーナは彼が本気なのだと認識する。

「んっ、うんん……っ」

触れるだけだった口づけが食むように変わり、徐々に深くなる。マリーナは逃れようと身を振るが、腰を抱くクレイの力が強くなり、密着度が増してしまった。

固く閉じた唇を舌でつつかれ、マリーナのこめかみがぴくりと震える。

（クレイさんって、こんなに強引な人だったの！？）

多少のショックを受けながら、マリーナは首を振ってなんとか顔を離す。一瞬見えたクレイの表情は、どこか切なげで寂しそうだった。

クレイはマリーナを抱きしめたまま、肩に顔を埋める。首筋に触れる髪は、見た目から想像するよりもくすぐったい。

「好きだ、マリーナ。いつかこうして触れ合いたいと、ずっと望んでいた」

弱々しい声にマリーナは絆ほだされそうになる。しかしいつものクレイと差がありすぎて、すぐには信じられない。

「そんな素振りそぶ、これまで一度も……」

「そうだな……表に出さないようにしてきた。どうせ親が決めた、好きでもない相手と結婚すると思っていたから」

（それは私も思ってたし、実際そうなんだけど……）

もし本当にクレイがマリーナを好いているなら、感情が昂たかぶつても仕方がないかもしれない。親が決めた婚約者が好きな人であるなど、そうそうあることではないのだから。

「マリーナ……」

先ほど唇を塞いだものと同じ感触が、今度はマリーナの首筋に触れる。マリーナの口から、思わず「ひゃっ！」と変な声が漏れてしまう。

「く、くすぐったいです、クレイさん……っ」

「嫌か？」

マリーナは言葉に詰まる。嫌だというほどの不快感はない。しかし、嬉しいという喜びもない。

（どうしたらいいんだろう……。ちょっと前の時代なら、結婚前にそ・う・い・う・こ・と・を・す・る・の・は避けられたけど、今はわりと普通だし……。それに拒否すると、結婚後が大変かも……）

そう思い、マリーナは受け入れることを決意する。きっと愛情は後からついてくるだろう

う。

「嫌ではない、です。なので、あの……大丈夫です」

あまり雰囲気合った返答ではないが、受け入れの返事だというのは伝わったようだ。クレイはマリーナの頬に触れ、再び口を塞ぐ。

唇を舐められ、マリーナはそつと口を開く。ぬるりと入ってきた熱い舌が、感触を確かめるようにマリーナの舌に触れる。

「ん……ふっ、うん……っ」

触れるだけだった舌が徐々に絡まり、くちゆくちゅと濡れた音が響く。体の中で反響しているだけだとわかっているのに、外に聞こえてしまうのではと心配になる。この部屋は歌っても隣の部屋に聞こえないほどの防音性能があり、何の心配もいらないのだが。

だんだんと、マリーナの思考が靄もやに包まれていく。心がついてこないのではという不安は、どこかに消えていった。

クレイの手がマリーナの肩に触れ、上着をぱさりと落とす。ごつごつとした手が薄いネグリジェの上を這い、やがて胸のふくらみにたどり着く。

「んんっ！」

小さな刺激に、マリーナの腰が震える。手はふくらみ全体を包み、優しく回すように揉み始める。

「んっ、んんっ、ふうんっっ」

（なに、これ……きもちい……っ）

自慰すらほとんどしないマリーナには、未知の感覚だった。触れられているのは口と胸なのに、腰のあたりがじわじわと温かくなる。

やがて立っていられなくなり、ガクンと膝が崩れる。倒れるかと思ったが、クレイに支えられていたおかげで無事だった。

クレイの唇が離れ、銀色の糸が名残惜しそうに二人の舌を繋ぐ。プツンと切れたそれは、

マリーナの口の端をてらてらと汚した。

マリーナはぼんやりとクレイを見る。いつも涼やかな黒い瞳には、たしかな欲情が宿っていた。

クレイはマリーナを軽々と横抱きにし、ベッドに横たえる。ブーツを脱ぎマリーナにまたがると、安いベッドがギシツと音を立てる。

クレイの手がネグリジェの裾をくぐり、太ももを伝いショーツに触れる。マリーナはいよいよするのだとぼんやりと思う。しかしクレイがきつそうな自身を取り出すことはなく、代わりに挿ってきたのは長い指だった。

「いっ………！」

マリーナは小さな痛みに顔をしかめる。霞んでいた頭も少し冴えた。何も受け入れたことのないそこは、濡れていれば挿るわけではないらしい。

「痛いかな？」

クレイは手を止め、心配そうにマリーナを見る。マリーナは反射的に首を横に振る。

「いえ、大丈夫です……」

「平気かどうかではなく、痛みがあるかと聞いている」

（うつ……）

名家の娘として厳しい教育を受けてきたマリーナは、つい「大丈夫」と言う癖がついている。幼なじみのロイにもよく指摘された。

（正反対の兄弟に見えるのに、こういうところは似てるのね……）

マリーナは観念して、小さく息をこぼす。

「すみません……少し痛いです」

「わかった」

クレイは指を抜き、ネグリジェの裾を大きくめくり上げる。ショーツを履いているとはいえ下半身を露出している状況に、マリーナは羞恥で顔を赤くする。その最後の砦もあつけな

く下ろされ、自分でも見たことがないそこが、完全にクレイの前にさらけ出された。

「マリーナ、足を広げられるか？」

マリーナは控えめに足を開く。しかしそれでは足りなかったのか、クレイはマリーナの内腿ももに手を入れ、がばつと左右に割る。

「ひやつ……!!」

マリーナは咄嗟とっさにそこを手で隠そうとしたが、クレイに手首を掴まれ阻まれる。心は逃げ出したいほど恥ずかしいと思っているのに、身体は期待するように割れ目の奥から蜜あふを溢れさせている。

クレイはマリーナの足元に屈み、割れ目を指で左右に開く。そこに顔を近づけ、舌を尖らせた。

「ふぁあっつ!!」

先ほど指で痛みを覚えたところに、温かく分厚いものが浅く差しこまれる。それは入り口

を広げるように、ぐるぐると円を描く。

(そんなとこ舐めるなんて……っ)

「あのっ、汚いですから……!!」

暗に「やめてほしい」と伝えたのだが、クレイが舌を止める様子はない。むしろ挿入は深くなり、マリーナの腰がビクリと跳ねる。

「うんっ、んんっっ」

(変な声出そう……!!)

マリーナは両手で口を覆う。しかし音の出口が鼻に変わっただけで、甘さは堰^せき止められずに身体を抜ける。

クレイの舌はどんどん奥に進んでいる。じゅるじゅると聞こえる音は、溢れる蜜を吸っているのかもしれない。

(やだっ、そんなの吸うなんて……)

そう思うのに、マリーナの身体はぐっと熱さを増す。本心では拒否していないと、マリーナも自覚していた。

やがてクレイが舌を抜き、マリーナはほっと息をつく。そのころには、マリーナから力が抜け、口を押さえていた手は頭の横に投げ出されていた。

やっと挿れるのか……と思ったが、まだその段階ではないらしい。差しこまれたのは、先ほど痛みを感じた指だった。

「んああっ！」

（あれ、痛くない……）

マリーナはほっと息をつく。圧迫感覚はあるが、そのうち慣れるだろう。

「痛みはないか？」

「はい……」

クレイはわずかに眉をハの字にする。きつと安心しているのだろう。乏しい中にも表情の

変化があることが、だんだんマリーナにもわかるようになってきた。

指が奥を広げるように曲がり、マリーナの腰がびくりと跳ねる。指は探るように、狭い膣内を前後し始める。

「うっ、うう……」

（やっぱり、慣れないかも……）

異物感にマリーナは顔をしかめる。耐えられる範囲だが、これが気持ちよくなる未来が見えない。

それにクレイも気づいたのか、指の動きが緩慢になる。クレイは再び秘部に顔を寄せ、舌を差し出す。

（また、ナカ舐めるのかな……）

マリーナはそう思ったが、舌に包まれたのは別の場所だった。

「ふああっ！？」

マリーナの身体に強い電流が走る。指を飲み込む蕾より上に位置するそこに、敏感な芽があるのはマリーナも知っている。しかしこんなにも感じるなど、想像もしていなかった。

芽がぬるりとした温かさに包まれる。ざらざらした感触に擦られ、むず痒さに似たものがそこに集まってきた。

「ああっ、んっ、あああっっ！！ や、あああんっっ！！」

（なに、これ……！）

それが何なのか、マリーナはまだ自覚できていない。ただビリビリとした感覚が広がり、無意識に腰が反る。反射的に脚を閉じようとするが、クレイの顔を挟んだだけだった。

気づけば、蕾を開く指が二本になっている。ぐちゅぐちゅと響いているのは、蕾と芽のどちらを擦る音なのだろうか。

そうされるうちに、ゾクゾクとした何かがマリーナ奥から這い上がってくる。未知の感覚に困惑し、マリーナはかぶりを振る。

「だめ、ですう！　なんか、きちやう……っ！！」

「構わない。そのまま身をゆだねろ」

クレイは手も舌も止めず、むしろ動きを強くする。這い上がる感覚が強くなり、マリナーの視界に星が散った。

「やつ、だめ、あつ、あああ~~~~~~~~~~~~っ！！！！」

ドクンッ！

マリナーの下腹部が強く脈打つ。つま先までピンと逸らし、マリナーの視界が真っ白に染まった。

（なに、今の……）

マリナーが放心している間に、クレイは十分に濡れた蕾から指を抜く。汚れていない方の手で、マリナーの頭をぽんぽんと撫なでた。

「驚かせたか？　すまない。だが上手にイけたな」

（いくつて……今のが……？）

現象としては知っていたが、実感が湧かない。しかしふわふわとした心地よさが、マリナーの身体に確かに残っている。

クレイがとうとう自身のスラックスに手をかける。前を寛げ、下着まで下ろすと……凶器のようにそそり立つものがブルンと現れた。

（おっ……きい……！）

へそまで届きそうな長さに、マリナーは不安になる。太さも指二本とは比べ物にならない。どおりで念入りに解していたわけだと、片隅の冷静な頭が分析する。

クレイは少し余裕のなさそうな顔で、先ほど広げた蕾に自身を押し当てる。マリナーの心配を余所よそに、蕾は待ちきれないとばかりにクレイに吸いついた。

「痛かったら言ってくれ。止める……努力はする」

止まれなさそうな雰囲気だが、マリナーはいったん信用してうなづく。クレイはマリナー

の脚を持ち、ゆっくりと腰を進めた。

「ぐっ……んんっ、ううう……」

（苦しい……っ）

指とは比べ物にならないほどの圧迫感がマリリーナを襲う。先ほどまでのふわふわとした心地は、完全に消えていた。

シーツを掴んで耐えていると、クレイが動きを止めてマリリーナの拳を大きな手で包む。

「マリリーナ、息を吐け。力を抜いた方がいい」

マリリーナはクレイの言葉に従い息を吐く。たしかに、先ほどより圧迫感が減った気がする。

クレイが再び動き出す。ゆっくりと、時間をかけてマリリーナとの隙間を埋めていく。

「あっ、うんんっ」

最奥にクレイがぶつかり、マリリーナから鼻にかかった息がこぼれる。目に映る限りクレイ

の剛直は収まりきっていないが、これ以上進む様子はなさそうだ。

(熱い……)

ドクンと脈打つクレイのものは、内から焼いているかのように熱い。彼の秘めた熱情が溢れ出しているかのようにうだ。

クレイは労わるようにマリーナの頬に触れる。

「マリーナ、痛くはないか？」

「はい……」

「少しずつ動く。痛かったら、どこでもいいから抓つねってくれ」

終始痛みを気にするクレイは、それほどマリーナを大切に思っているのか、もしくはよほど自分のモノが大きい自覚があるのか。マリーナにはわからないが、その心遣いに嬉しさを覚える。

宣言通り、クレイはゆつくりと動き出す。緩い抽挿ちゅうそうは、マリーナとの境を馴染ませている

かのようにだ。

「んっ、んん……ああ……っ」

次第に異物感が薄れ、マリーナは心地よさを感じ始める。クレイの先端の張り出したところ
が腹の内側を擦る度、ゾクゾクとしたものが腰から湧き上がってくる。

クレイの動きが徐々に早くなり、つなぎ目からずちゅずちゅと濡れた音が聞こえる。クレイの漆黒の瞳に映るマリーナは、すっかり蕩けた顔をしていた。

「あっ、んん、んあっ、あ、ああっ」

苦し気だったマリーナの吐息が、いつの間にか甘い色に染まっている。クレイも悩ましげに顔を歪め、ゆが熱い息を吐いている。

クレイは、マリーナの奥をリズムカルにノックする。マリーナはその動きにほんろう翻弄され、感じるままに声を上げる。

「ああっ！ あっ、あん！ ああ、んっ、ああんっ！」

「マリーナ……^{ナカ}臍内に、出していいか……？」

マリーナは勢いで肯定しそうになるが、わずかに残っていた冷静な思考が待ったをかける。婚約しているとはいえ、二人は結婚前だ。

（今更ではあるんだけど、もしこれで子供ができたら……）

そう考え、マリーナは大丈夫だと結論付ける。どうせ結婚するのなら、順番が早いか遅いかでしかない。母がマリーナの兄を身籠ったのも、結婚前だったと聞いている。

「はい……大丈夫、です……っ」

マリーナが答えると、クレイは穿つ速度を上げる。そして一番深いところで止まり、ぶるりと熱を吐き出した。

「あっ……あああ……」

（本当に、出てる……）

マリーナは心地よさに身体を震わせる。注がれる熱は、マリーナを内側から焼き尽くすか

のように熱い。

やがて、出し切ったクレイがずるりと抜けていく。糸を引いて溢れた白濁には、わずかに赤色が混じっていた。

クレイは深く息を吐き、情緒のないあっさりした動きでベッドから降りる。

「シーツを汚してしまったな。洗おう」

そうして躊躇なくベッドからシーツを外そうとしたクレイに、マリーナは慌てて手を伸ばす。

「だ、大丈夫です！ 洗っておきますから！ あの、ちょうど他にも洗いたいものがあるの
で……」

「他にも洗いたいものがある」など見え透いた嘘だが、クレイは気にしていないようで、見慣れた無表情で下着とスラックスを履く。

「そうか。なら、すまないが任せよう。では……また明日」

少しだけ名残惜しそうに、クレイは部屋を出る。扉が閉まった途端、マリーナの口から大きなため息が飛び出した。

「はぁ~~~~~~~~……しちゃったぁ……」

思い出すとあまりに恥ずかしく、マリーナは両手で顔を覆う。触れた頬は、火が出そうなほど熱い。

（職場でどんな顔して会えばいいの……？）

マリーナが所属する水務課は、クレイが部長を務める公共事業部に属している。顔を合わせる機会は、多くはないが絶対に訪れる。

しかし、このために異動願いを出すのも面倒だ。それにマリーナは、国民の飲み水の管理をする水務課の仕事が気に入っている。誰かの生活を支えられることほど嬉しいものはない。

（気まずい……けど、仕方ないか……）

マリーナは諦めてベッドを降りる。シーツを見ると、中央に小さく赤色が散っている。白と混じったそれがあまりに生々しく、マリーナは再びため息をつく。

（染み抜きしよ……）

マリーナは赤色に向かって手を翳す^{かざ}。その途端、染みを囲うように水の輪が出現した。

輪の中に薄く水の膜が張り、中心から溢れた水滴がシーツに落ちていく。染みが十分に濡れると、今度はシーツから水が浮かび上がり、輪の中に吸い込まれていく。全ての水分が輪に吸い込まれたとき、シーツは元の白色に戻っていた。

マリーナは染みがあった箇所をじつと見つめ、満足げに微笑む。

「うん。きれいにできた！」

マリーナはベッドに寝ころび、今度こそ眠ろうとまぶたを閉じる。じんじんとした感覚が、まだ下腹部に残っていた。